

戦後新聞紙面における「男性標示語」の推移¹

徐 微潔

キーワード：男性標示語、女性標示語、ジェンダー表現研究、新聞、推移

1. はじめに

ジェンダーはフェミニズムによって提案された概念で、「社会的・文化的・歴史的につくられた性別」という意味で使われている。これまでの「言語とジェンダー研究」は大きく「ジェンダー表現研究²」と「言語使用とジェンダー研究」に分けられ、前者は女性や男性を表現することばに焦点を当て、性差別語や性差別表現を取り上げられてきたのに対して、後者は女性や男性のことばづかいの性差にかかわっている。中村（1995：11）では、「ジェンダー表現研究は、大きく二つの流れに分けることができる。ひとつは、he/manに代表されるように、男というジェンダーはどのように表現されているのかという研究。もう一つは、女というジェンダーはどのように表現されているのかという表現である」と指摘している。

「ジェンダー表現研究」に関する研究蓄積は多く、日本語におけるジェンダー表現研究の成果も少なくない。ジェンダー表現研究の一環として、徐（近刊）では、従来「女性冠詞³」といった表現を「女性標示語」と命名し、その使用実態について考察した。徐（近刊）では、「女性標示語」を次のように定義している。

①職業、身分、属性などを表わす合成語の前項要素。

②そういう職業、身分、属性を有している女性を表わす。

以上の定義に照らして、「女性標示語」の「平行表現⁴」としての「男～」「男子～」「男性～」などを「男性標示語」と呼び、「①職業、身分、属性などを表わす合成語の前項要素、②そういう職業、身分、属性を有している男性を表わす」とする。

日本語の「女性標示語」に関する研究成果はいくつか見られるが、「男～」「男子～」「男性～」などの「男性標示語」についての研究はあまり行われていないようである。ジェンダー表現研究の流れとして、女というジェンダーの表現としての「女性標示語」だけでな

¹ 本研究は平成23年度浙江省外文学会科研費「現代日本語“女性標示語”的研究」（現代日本語「女性標示語」の研究）（課題番号：ZWYB2011014）による成果の一部である。

² 「ジェンダー表現研究」と「言語使用とジェンダー研究」は中村桃子（1995）の用語である。詳しくは、中村（1995：6）を参照されたい。

³ 田中和子（1984）の命名で、田中は「さて、以上に示してきた、女性を“男性＝人間”から区別するための徴づけとしての“女〇〇”、“女子〇〇”、“女性〇〇”、“女流〇〇”といった語法を、かりに「女性冠詞」と呼んでおこう。」と定義している。詳しくは、田中（1984：195）を参照されたい。

⁴ 「平行表現」は田中・諸橋（1996）の用語で、性別を明らかにする必要のある際取る「女優」と「男優」、「女子選手」と「男子選手」、「女性社員」と「男性社員」などのような表現のことである。

く、男というジェンダーの表現としての「男性標示語」についても研究する必要があると思われる。

本稿では、新聞のデータベースを利用し、「男性標示語」に関する量的調査を行い、戦後新聞紙面における「男性標示語」の推移を分析、考察することを通し、社会の変化が言語に与える影響を考えたい。

2. 先行研究と問題点

2.1 先行研究

1970年代から「女性標示語」が注目され、1984年に田中和子によって「女性冠詞」と命名されたのに対して、「男性標示語」に目を向けられたのは90年代になってからのことである。管見の限りでは、「男性標示語」に関する研究は少なく、注目すべきなのは、田中他（1996、2011）、岡野（1996）である。

以下、これらの先行研究を概観し、問題点を指摘する。

田中他は1980年代の半ばから2006年まで5年おきに全国主要三紙（朝日、毎日、読売）半月分の記事を調査してきた。調査結果を分析し、逐次『国学院法学』などに発表した。発表された論文の中で、本稿と関係の深い2本だけを紹介する。

田中他（1996：50 - 51）では、「男性標示語」は「女性標示語」と比べ、非常に少なかったが、両者の使用頻度が次第に接近してくる傾向が見られると言っている。そして、田中他（2011：136 - 152）では、「男性標示語」の使用頻度は直線的な増加傾向を示し、特に「男性」のつくことばの増加が激しい。また、男女を問わず、記事で言及する人物の性を職業や役職などに冠して明示する傾向が強まってきたと述べている。

岡野（1996）は、朝日・毎日・読売の主要三紙を対象に、1993年一年分の新聞記事を調査、女性が政治記事においてどう表現されるかを分析し、「男性標示語」にも触れた。岡野（1996：150）は、「こういう、性別に焦点がある文脈では、男性冠詞が用いられる傾向があり、それ以外の場合の多くは無標の男性が前提されているといえよう」と述べ、「男性標示語」の使われている文脈を挙げた。

2.2 問題点

2.1で述べた先行研究を整理すると、以下のような問題点が指摘できる。①「男性標示語」に触れた研究はそもそも少なく、「男性標示語」に考察を加えた研究に至っては、管見の限りあまりない。②「男性標示語」に触れた研究は90年代後半に行われたもので、それ以前、特に80年代以前の使用状況が把握しにくい。③「男性標示語」の使用頻度の変化と社会との関係が殆ど言及されず、変化しつつある社会が言語に与える影響などが不明瞭である。

そこで、本稿では、以上の先行研究の問題点を踏まえ、主要全国紙の『朝日新聞』における「男性標示語」の推移、特に戦後新聞紙面における「男性標示語」の年代による変化を分析、考察することを通して、社会の変化が言語に与える影響の一端を考えたい。

3. 調査方法

3.1 対象

本稿は、情報の網羅的な検索が可能である新聞を対象にした。その上、発行部数が多く、購読率の高い全国紙である『朝日新聞』から「男性標示語」の出現した記事を調査し分析を行った⁵。

検索対象は朝日新聞社が発行している『朝日新聞』の朝夕刊とし、記事検索には朝日新聞記事検索データベースを用いた。対象期間は、1945年1月1日から2009年10月末日までの65年間とした。1945年から1984年は朝日新聞縮刷版を対象にした。

なお、対象期間は65年としたが、戦後から昭和末期までは、1945年、1955年、1965年、1975年と1985年、10年ごとにそれぞれ一年間の記事を調査し、平成元年(1989)からは、掲載記事の分量を考慮し、1989年、1999年と2009年のそれぞれ10月1日から31日までの一ヶ月分の記事を調べた⁶。

3.2 手順

本稿では、「男性標示語」を対象としているが、その「平行表現」の「女性標示語」の「女・女子・女性・女流」との対応で、「少年」「美男」「青年」などを割愛し、「男・男子・男性・男流⁷」の4語だけに絞った。検索のキーワードも「男」「男子」「男性」「男流」とした。

検索結果から、「男性標示語」ではない「男～」「男子～」「男性～」「男流～」⁸を除外し、「男性標示語」のつくことばを精査し、年度別にその出現件数をカウントした。

4. 集計と分析

昭和期と平成期における「男性標示語」の推移と内訳をそれぞれ把握するため、本稿は、

⁵ 日本ABC協会「新聞発行社レポート半期・普及率2009年7月～12月平均」によると、朝日新聞は朝刊8,018,572部と夕刊3,229,512部で読売新聞の朝刊10,018,701部、夕刊3,648,233部について全国五紙では発行部数が2位だそうである。なお、五紙とは読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、日本経済新聞と産経新聞のことである。

⁶ 本稿では、各「男性標示語」がそれぞれの年代での割合と優劣順位を見ることを通じて、言語と社会の関係論を論じるため、各年代の総記事数を厳密に揃えていない。また、「聞蔵Ⅱビジュアル」の収録記事数は、戦後は220万件で、84年以降(09年1月まで)は580万件である。平成元年以前とそれ以後では年間の記事数が約1:5程度と大幅に異なるため、平成元年以降は一ヶ月にした。

⁷ 「男流」ということばは原則として存在しないが、「女流」との対応で、今回の調査対象に取り入れた。「女流棋士」「女流俳人」「女流作家」など「女流」のつくことばは数多くあるのに対し、今回の調査では「男流」のつくことばは1件も見られないのは、示唆的な事実である。そして、調査範囲を広げ、1945年1月1日から2009年12月31日までの全記事を調べた結果、「男流歌人」「男流作家」など「男流」のつくことばが6件あることが分かった。ただし、6件のうち、「男流歌人」2件は作品名で、残り4件もいずれも一般的な使い方ではない。例えば、

(例) ちなみに、「女流作家」「女医」という言葉はあっても、「男流作家」「男医」はない。かつては作家や医者が男性なのは当たり前で、女性の作家や医者は珍しかったからだ(これも今は昔だが)。(朝刊 1999/11/4)

⁸ 「男爵」「男伊達」「男子更衣室」「男子研修」「男子団体」「男性支配」「男性側」「男性同士」などのことばも見つけたが、本稿における「男性標示語」の定義と一致しないため、除外する。

調査期間を戦後～昭和末期と平成元年（1989）～今現在⁹に二分し、「男性標示語」の推移を考察していく。

4.1 戦後～昭和末期

戦後から昭和末期までの「男性標示語」のつくことばの出現件数と全体構成比を【表 1】にまとめた¹⁰。

【表 1】「男性標示語」のつくことば () 内は構成比

	1945 年		1955 年		1965 年		1975 年		1985 年		
	語 例・件数		語 例・件数		語 例・件数		語 例・件数		語 例・件数		
男	オ ト コ	男やもめ署員	1	男友達	1	男友達	2	男友だち	1	男友達	6
				男衆	1	男客	1		男衆	2	
						男やもめ	1			その他	3
			ダ ン					男優	1	男優	1
小計 1 (25.0%)			小計 2 (66.7%)		小計 5 (100%)		小計 2 (40.0%)			小計 26 (8.9%)	
男 子	男子放送員	1	男子最優秀選手	1			男子警察官	1	男子生徒	56	
	男子中学生	1					男子学生	33			
	男子予科練生	1						男子社員	12		
							その他	49			
	小計 3 (75.0%)		小計 1 (33.3%)		小計 0 (0.0%)		小計 1 (20.0%)		小計 150 (51.4%)		
男 性							男性客	1	男性社員	15	
							男性出席者	1	男性客	13	
									男性職員	10	
									その他	78	
小計 0 (0.0%)		小計 0 (0.0%)		小計 0 (0.0%)		小計 2 (40.0%)		小計 116 (39.7%)			
男 流											
	小計 0 (0.0%)		小計 0 (0.0%)		小計 0 (0.0%)		小計 0 (0.0%)		小計 0 (0.0%)		
合計 4		合計 3		合計 5		合計 5		合計 292			

⁹ 厳密に言えば、戦後は 1945 年 8 月 15 日以降で、1989 年の年始からの 7 日間が昭和 64 年で、1989 年 1 月 8 日以降の 358 日が平成元年だが、本稿では便宜上、1945 年 1 月 1 日からを戦後とし、1989 年 1 月 1 日からの 365 日を平成元年とする。

¹⁰ 「男」は「オトコ」「オ」と訓読みすることも「ダン」と音読みすることもでき、その読みによって性質も異なってくるようである。本稿では「男」の異なる読み及び読みによって引き起こされた性質などへの考察を別稿に譲ることとし、「男性標示語」の推移についてのみ触れておきたい。また、「男児」ということばは、45 年、55 年、65 年、75 年と 85 年にそれぞれ 8 件、2 件、1 件、3 件と 37 件の頻度で出現したが、本稿は「女性標示語」の「平行表現」としての「男性標示語」のつくことばを対象として扱うため、「男児」を研究対象から除外する。

【表 1】から分かるように、「男性標示語」の総数は、85年の292件を除いて、45年、55年、65年と75年は、それぞれ4件、3件、5件と5件で、あまり差が見られず、いずれも一桁にとどまっている。

「男性標示語」の内訳と推移をみてみると、まず、「男友達」「男優」など「男」のつくことばは75年までは1件、2件、5件、2件で、85年では26件見られた。「男」のつくことばで、読みが「オトコ」となることばは5年間で合計19件(52.8%)、読みが「ダン」となることばは17件(47.2%)、読みが「オ」となることばは見つからなかった。「男子」が頭につくことばは65年は0件で、45年、55年、75年はそれぞれ3件、1件、1件、85年では「男子生徒」の56件をはじめ、計24種150件である。「男性」が頭につくことばは45年、55年、65年は見られなかったが、75年には2種2件、85年には「男性社員」を筆頭に46種116件へと増加した。「男流」をつけたことばは見られなかった。

それぞれの「男性標示語」の占める割合をみると、まず、「男」のつくことば、45年から75年まではそれぞれ全体の25.0%、66.7%、100%、40%の割合で優位を見せた。「男子」は65年を除き、45年、55年、75年ではそれぞれ75.0%、33.3%、20.0%を占め、優勢を示している。「男性」は65年までは0%であるが、75年は「男」と同じ40%を占めている。そして、85年のデータをみてみると、「男子」は51.4%、「男性」は39.7%、「男」は8.9%となることが分かった。

4.2 平成元年(1989)～今現在

平成元年(1989)から今現在(2009)まで、「男性標示語」のつくことばの出現件数と全体構成比を【表 2】に示した。

【表 2】「男性標示語」のつくことば () 内は構成比

		1989年		1999年		2009年	
		語 例・件数		語 例・件数		語 例・件数	
男	オ ト コ	男友達	4	男衆	5	男衆	9
		男衆	1	男芸者	1	男友達	4
						男みこし	1
	ダ ン	男優	6	男優	2	男優	8
		男生徒	1			男娼	1
	オ					男神	2
	小計		12 (13.6%)		8 (1.9%)		25 (3.2%)
男 子	男子生徒	15	男子生徒	61	男子生徒	70	
	男子学生	6	男子高校生	20	男子高校生	21	
	男子中学生	3	男子学生	12	男子学生	21	

	男子児童	2	男子中学生	11	男子大学生	15
	その他	8	その他	57	その他	38
	小計 34 (38.6%)		小計 161 (39.0%)		小計 165 (21.3%)	
男 性	男性会社員	3	男性会社員	49	男性会社員	83
	男性教師	3	男性教諭	20	男性職員	49
	男性職員	3	男性社員	19	男性教諭	38
	男性会員	3	男性職員	17	男性店員	36
	その他	30	その他	139	その他	378
	小計 42 (47.8%)		小計 244 (59.1%)		小計 584 (75.5%)	
男 流						
	小計 0 (0.0%)		小計 0 (0.0%)		小計 0 (0.0%)	
合計 88		合計 413		合計 774		

【表 2】に示した通り、89 年、99 年、2009 年の「男性標示語」の総数はそれぞれ、88 件、413 件、774 件で、増加している。

「男性標示語」の内訳と推移をみると、「男」のつくことばは 89 年は 4 種 12 件、99 年は 3 種 8 件、2009 年は 6 種 25 件見られた。内、読みが「オトコ」となることばは合計 25 件 (55.6%)、読みが「ダン」となることばは 18 件 (40.0%)、読みが「オ」となることばは 2 件 (4.4%) である。「男子」が頭につくことばは、89 年には 11 種 34 件、99 年には 30 種 161 件、2009 年には 18 種 165 件出現した。「男子生徒」の出現頻度が最も高く、3 年とも第一位である。そのほか、「男子学生」「男子高校生」も上位に使用されている語である。「男性」のつくことばは 89 年は 27 種 42 件、99 年は 67 種 244 件、2009 年は 584 件へと増加した。「男性会社員」が 3 年ともトップとなっている。「男流」のつくことばは依然として現れなかった。

全体の構成比からみると、まず、「男」のつくことばの割合は、それぞれ 13.6%、1.9%、3.2%で、減少している。「男子」のつくことばの割合も、38.6%、39.0%、21.3%で、減少傾向を示している。「男性」のつくことばの割合は、89 年には 47.8%、99 年には 59.1%、2009 年には 75.5%に変わり、増加傾向を見せた。

そして、調査期間内の「男性標示語」の種類別出現件数をトータルすると以下の【表 3】のようになる。

【表 3】「男性標示語」の出現件数と構成比

年代	男性標示語			男子	男性	男流	総件数
	男	オトコ	ダン				
戦後～昭和末期	19	17	0	155	118	0	309
平成元年～今現在 (2009)	25	18	2	360	870	0	1275
合計	81			515	988	0	1584
構成比 (%、合計/総件数)	5.1			32.5	62.4	0	100

以上の【表 3】に示したように、戦後（1945～2009）新聞紙面に現れた「男性標示語」の総件数は、「男」81件、「男子」515件、「男性」988件、「男流」0件で、全体の構成比からみてみると、「男」は1割以下（0.5割）、「男子」は3割強、「男性」は6割以上を占めている。「男性」が男性の一般呼称として優勢を示している。

4.3 まとめ

以上をまとめると、次のことが言えよう。

「男」の冠されたことばは限られ、「男流」ということばはそもそもない。「男子」は使用域が大きく偏っており、下記例（1）と（2）のように、「生徒」や「学生」など「学生」の身分を表す語に冠するのが一般的である。「男性」という「男性標示語」のつくことばは多種多様で、「学生、高校生、生徒」などの未成年者を表すことばの以外に、後項要素に制限があまり見られない。

- （1）男子生徒の一人は「きりがないので疲れる」といいながらも楽しそうだった。保育学習は二十九日まで続き、二百三十五人の三年生全員が体験する¹¹。
（朝刊 1999/10/28）
- （2）先に発表された男子学生の人気企業1位は、文科系で東京海上火災保険、理工系は日本電気だった。
（朝刊 1985/9/20）

「男性標示語」の年代別割合を見渡した結果は、総じて、「男」及び「男子」の割合が減り、「男性」の割合が増えていると言え、「男性標示語」は「男性」を頭に冠する表現に収斂しつつあるように受け取れる。「男性」は1970年代から頭角を表し、1980年代に入ってから男の一般呼称として優位を占めつつある。

漆田（1993：135）では、「女性」という語は、今日「婦人」という語にとってかわり、女の一般呼称となりつつある。この見方に大方異存はないであろう。「婦人」ほどにはかし

¹¹ 本稿で挙げる例文は全て調査期間内の『朝日新聞』の記事からのもので、便宜上、『朝日新聞』の4字を省略し、朝刊、夕刊と期日だけを記すことにする。なお、例文に現れた「男性標示語」のつくことばの下線と太字は筆者によるものである。

こまってもいないし、「女」ほどに性的な生々しさももたない。非性的ではないが、ちょっぴりとりすぎたスマートさがある」と述べ、「女性」が優位を占めつつある原因を指摘した。「女性」の対称語としての「男性」の順位の上昇にも似た理由が考えられるかもしれない。われわれが言語を手がかりに社会を知ろうとしている背景には「言語は社会を反映している」つまり、「ある社会で用いられている言語はその社会の構造・必要性・権力関係をそのまま映し出している」という考えが存在している（中村 1995：3）。ジェンダー表現形式としての「男性標示語」もその時々々の社会背景、動きを如実に反映している。次の例（3）～（6）を見られたい。

- （3）町選管によると、男性議員が役員の建設会社は町との契約実績があり、男性から役員をやめたという届けはなかった。（朝刊 1999/10/16）
- （4）ゼバスティアンと妻の心理戦、肉食系の女性警部に仕える草食系男性警察官の慕情、死期の迫るシルフに恋人が言う「あなたは、私の過去をきかなかった。私はあなたの未来をきかない」という取引——謎解きは男女の心模様と泣かせる言葉を織り込んで潤いを増してゆく。（朝刊 2009/10/25）
- （5）県立下呂温泉病院（下呂市）は9日、放射線科の男性医師（42）が道交法違反（酒気帯び運転）の疑いで下呂署に検挙されたと発表した。県が処分を検討している。（朝刊 2009/10/10）
- （6）同課などによると、派遣料は男性労働者が1時間1600円、女性は1100円だったが、同社が男性の場合600円、女性は550円をそれぞれピンハネしていたとみられる。（朝刊 1989/10/13）

「議員」「警察官」「画家」「医師」「労働者」などは、無標で暗黙に男性が仮定されている。しかし、昔は男性ばかりの職場に女性が大量に進出するにつれて、「男性議員」「男性警察官」「男性医師」「男性労働者」など「男性標示語」のつくことばも記事に現れるようになってきた。

5. 考察

以上の分析で分かるように、総じて言えば戦後新聞紙面における「男性標示語」の出現頻度は高くなり、各「男性標示語」の割合も年を追って変化している。「男」と「男子」の割合は低下したのに対し、「男性」の割合は上昇した。「男流」は皆無である。

上野他（1996：156）は、家庭内や社会においてこれまで「女性向け、女性の世界」とされてきた分野に男性が入ったときには、少数派である男性に「男性〇〇」と冠をつけ、「男性の世界」と思われてきた分野に女性が入った場合、その世界で少数派である女性に「女性冠」をつけていると述べている。

確かに、次の例（7）～（10）が示すように、これまで女性の領域とされてきた職業に男

性が参入すると、「男芸者」「男性ヘルパー」「男性保育士」「男性秘書」など「男性標示語」をつけて有標化されるのが一般的である。

- (7) 東京浅草組合の事務所奥に、芸者衆の名札が下がっている。見番は芸者が主役。男芸者の幫間はその後ろに名前を連ねる。「七好」の札は、最後から二番目にかかっていた。(朝刊 1999/10/13)
- (8) 県立医科大学の男性看護師 (35) が牛井店のドライブスルーで女性店員に下半身を見せたとして公然わいせつ容疑で現行犯逮捕された事件が先月あり、大学は14日、この看護師を停職1カ月の懲戒処分にした¹²。(朝刊 2009/10/15)
- (9) 県内でも数少ない男性保育士。婦中町の神保保育園に勤めて二年目になる。同園にいる七人の保育士のうち唯一の男性だが、「園内では男女の区別なく接してもらっている」と、意識はしていない。(朝刊 1999/10/27)
- (10) さらに、付属の重要事項説明書には、利用料金などのほか、ヘルパーの変更はできるか、男性ヘルパーがいるかといった利用者の関心が高い事項も書き込むようになっていた。(朝刊 1999/10/10)

しかしながら、これが出現件数増加の理由ならば、「男優」「男子生徒」「男性会社員」「男性教諭」などの多用はどう説明すればよいだろうか。田中他(2011:138)は、性別標示語の中で「男性標示語」のウェイトが高くなっている理由を以下のように挙げている。

1. 性別を記すことが大事な記事上の情報であるという、デスクや記者つまり新聞側の意識が高まっている。
2. 読者をはじめとする一般の人々が、登場人物の性別を知りたがる傾向が強まっている。
3. かつてよりも「人物」が言及される記事が増えている。
4. 「人物」が言及される際に、性別に付随する職業や属性などの情報が付加されるようになった。
5. 以前のように事件・事故の記事を中心に、「人物」を実名で報道せず匿名にする傾向が強まり、そのために性別およびそれに付随する職業や属性で当事者を表現しようとする記事が増えてきた。

以上の五つの理由は簡単に「新聞の送り手側と受け手側」と「記事内容」にまとめられよう。田中他(2011)が指摘したように、新聞記事の送り手側と受け手側の意識や記事内容の変化は「男性標示語」の増加と大きく関わっていると思われる。だが、以上のような

¹² 日本では、1948年に公布された『保健婦助産婦看護婦法』が2002年3月1日に『保健師助産師看護師法』に改正された。改正される前は、女性は「看護婦」、男性は「看護士」と呼ばれているが、改正後、男女を問わず、「看護師」と称されるようになった。また、「看護師の資格・仕事ナビサイト」の統計によれば、2006年、日本で、就業看護師の中、男性看護師の占める割合は4.7%、准看護師は6.1%で、増加しているそうである。

理由のほかに、「男性標示語」の増加には重要な原因が関与しているのではないか。

以下では、田中他（2011）の研究を踏まえ、「男性標示語」の使用変化の原因を社会運動などの角度から三つ挙げてみる。

まず、考えられる一番大きな原因は 1960 年代欧米を中心に盛り上がったフェミニズム運動の影響であろう。

フェミニズム運動は、社会改革に大きな成果を上げてきただけでなく、個々の研究分野の研究対象を広げ、学際的研究を促進する要因にもなっている（中村 1995：1）。「われわれの生きている社会が性によって人を差別する社会であるのならば、その差別をなくすよう努力していくことがフェミニズム運動の大きな目的である。そのためには社会の中の性差別がどのようなメカニズムを持っているのかを知る必要がある。言語は性差別のメカニズムを知る格好の手段である」と中村（1995：2-3）が指摘している。このように、フェミニズム運動は、女性の法的地位の向上のほかに、言語にも注目し、「言語の中の性差別の問題」を自分の研究分野に取り入れ、言語の性差別を指摘、それらを改革しようという言語改革運動を提案した¹³。

欧米で起きた以上のような動きは、日本にも波及した。日本では、1980 年代から、フェミニズムの視点による性差研究が一般化し、辞書の定義や用例の中の差別を指摘されたり、日本語の差別表現に関する包括的研究によりことばの重要性が認識されていたりした。さらに、新聞における男女の取り方の問題点が分析され、日本語における性差別表現のガイドラインにまで出された。

次に、フェミニズムのうねりを受けて生まれた『記者ハンドブック』『取り決め集』『用語集』などの「表現ガイドライン」が果たした役割だと考えられよう。

メディアの中の差別を考える会では、1996 年に日本初の新聞に関する非性差別表現原則を以下のように提案した。

1. 性別情報不問（ジェンダー・フリー）

「男＝標準、女＝例外、下位、特殊」という社会規範が浸透している現状では、必要がない限り性（ジェンダー）情報を含まない。特に、職業名は、男性と同一の職業分類で十分である。職業名としての「女流棋士」「女医」「女性宇宙飛行士」などは使わない。どうしても性別が必要であれば「男性〇〇」も積極的に使おう。

2. ジェンダー的公正（ジェンダー・フェア）

ジェンダーに関する情報が不可欠な場合には、表現方法、表記順、回数などにおいて公平・公正な取り扱いをする。

3. （両性の）対称な取り扱い（パラレル・トリートメント）

両性の職業名、肩書、敬称などは取り扱い、不均衡（差別）にならないようにする。

4. 包括的な表現（インクルーシブネス）

¹³ 言語改革運動については、D・カメロン（1990）、中村（1995）を参照されたい。

特定のグループや性を排除する言語や形式でなく、多様な集団を包括する言語や形式を使う。

5. 脱・固定概念 (バイアス・フリー)

性別役割分業観や、「男らしさ」、「女らしさ」など、特性が性に固有なものとする伝統的な価値観は差別につながる。(上野他 1996 : 8 - 9 より引用 下線は筆者)

朝日新聞社も 1994 年に「取り決め集'94」という小冊子を作成し、冒頭に「人種、民族、身分・地位、地域、職業(職種)、性別、病気・障害などについて、差別することは、人種を侵害するので厳に慎むべきである。」と書いてある。その中に数ページ分、「差別」の項が割かれ、差別用語や差別的表現の言い換え例、使わない言葉が列挙されている。

最後に、新聞記事の送り手側に起きた変化と関わっていると考えよう。送り手側に起きた変化は、一つは送り手側のジェンダーへの関心の高まり、もう一つは組織におけるジェンダー的構造の変化に分けることができる。後者は、つまり、女性が新聞業界に参入し、新聞の送り手や管理職になり、新聞業界の男女比を変えたことである。【表 4】を見られたい。

【表 4】新聞・通信社記者数の推移

年	記者数	うち女性記者数	女性記者の比率 (%)
2011	20,305	3,235	15.9
2010	20,406	3,180	15.6
2009	21,103	3,129	14.8
2008	21,093	3,108	14.7
2007	19,124	2,631	13.8
2006	20,773	2,642	12.7
2005	20,315	2,436	12.0
2004	20,979	2,450	11.7
2003	21,311	2,458	11.5
2002	20,851	2,384	11.4
2001	20,679	2,200	10.6
2000	19,434	1,976	10.2

(日本新聞協会の調査データを元に作成)

田中他 (2011 : 198) では、ジェンダー表現の場合でも、ガイドラインを作成してあるべき姿を明確に提示するとともに、メディアの送り手をはじめとする言語使用者に指針が周知され、実際に使用されるようにする手段を講じることが望ましいと述べ、送り手側からの性差別解消への重要性を指摘した。

6. まとめと今後の課題

本稿は、戦後新聞紙面における「男性標示語」の推移を通して、言語と社会の関係を論じ、社会の変化が言語の変化に与えた影響を考察した。本稿の考察で明らかになったのは、戦後新聞紙面における「男性標示語」では、「男」と「男子」の割合は低下したが、「男性」の割合が上昇し、男性の一般呼称として優位を占めつつあることである。その推移を引き起こした要因として、主に「フェミニズム運動」、「表現ガイドライン」と「新聞の送り手側の変化」の三つを挙げた。

今回の調査で、新聞紙面における差別表現は浄化され、改善される方向に向かっているように見えるが、解消したとは言えない。フェミニズム運動にせよ、ガイドラインにせよ、あらゆる差別的表現を網羅し逐一代替表現を掲げることは不可能である。「いくら言語を改善しても、性差別的に使用しようとする意図があるならば、改善された言語さえ性差別的に使用することができるのである」とD・カメロン(1990:309)は述べている。差別の改善には、ガイドラインは勿論重要だが、人々が言語とジェンダーに敏感になることも大切であろう。

そして、『朝日新聞』に限らず、資料の多様性を考え、ジャンル別に調査を行い、考察を深める必要もあると思われるが、今後の課題としたい。

【参考文献】

- 上野千鶴子・メディアの中の性差別を考える会編(1996)『きっと変えられる性差別語—私たちのガイドライン』三省堂
- 漆田和代(1993)「「婦人」「女」「女性」……—女の一般呼称考」『おんなと日本語』有信堂, 123-158
- 遠藤織枝(1997)「女性を表わす語句と表現—新聞の人物紹介と雑誌広告の欄から—」『女性語の世界』明治書院,94-113
- 岡野雅雄(1996)「政治面におけるジェンダー・バイアス」『ジェンダーから見た新聞のうら・おもて「新聞女性学入門」』現代書館,131-157
- 斉藤正美(1995)「ジェンダー的公正報道のガイドライン」『図書館とメディアの本　ず・ぼん』2号,新泉社,57-58
- 斉藤正美(2010)「差別表現とガイドライン—差別をつくる／変えることば」『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社,183-196
- 佐竹久仁子(2008)「ことばとジェンダー」『メディアとことば③　社会を構築することば』ひつじ書房,172-173
- 寿岳章子(1979)『日本語と女』岩波新書
- 徐微潔・房極哲(2010)「日中両言語の語彙に現れる性差について」『日本語教育』(韓国)6月号,81-94
- 高木正幸(1999)「「取り決め集」朝日新聞、1994年版」『差別用語の基礎知識'99』土曜美術社出版販売,296-302

- 田中和子(1984)「新聞にみる構造化された性差別表現」『マスコミと差別語問題』明石書店、179-201
- 田中和子・諸橋泰樹(1996)「新聞は女性をどう表現しているか」『ジェンダーから見た新聞のうら・おもて「新聞女性学入門」』現代書館、38-80
- 田中和子他(2006)「新聞において女性はどうのように表現されているか—「新聞紙面にあらわれたジェンダー」第四回調査を中心に—」『国学院法学』第43巻第4号、69-162
- 田中和子他(2009a)「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在—「新聞紙面にあらわれたジェンダー」第五回調査を中心に—」『国学院法学』第46巻第4号、55-134
- 田中和子他(2009b)「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在(その2)」第五回調査の多変量解析と投書欄、テレビ面・ラジオ面、「少年」の用法の分析を中心に—」『国学院法学』第46巻第4号、1-83
- 田中和子他(2011)「ミレニアムを通過した新聞ジェンダー表現の現在(その3)—「延べ語数」と「異なり語数」のへ経年分析および「言語計画」の観点から—」『国学院法学』第48巻第4号、127-227
- 中村桃子(1995)『ことばとフェミニズム』勁草書房
- 中村桃子(2001)『ことばとジェンダー』勁草書房
- D・カメロン著、中村桃子訳(1990)『フェミニズムと言語理論』勁草書房
- 湯浅俊彦・武田春子(1997)『多文化社会と表現の自由：すすむガイドライン作り』明石書店
- れいのるず・秋葉かつえ(1998)「日本語の性差別」『「ことば」に見る女性』東京女性財団、214-232
- 徐微洁(近刊)「<日語中“女性标示语”使用现状考察——以《朝日新闻》的报道为例>」《日语学习与研究》

【資料】

朝日新聞(開蔵Ⅱビジュアル)

【参考ウェブサイト】

- 日本ABC協会 <http://adv.yomiuri.co.jp/yomiuri/busu/busu01a.html> 2011.10.16 参照
丸善のライブラリアン向け情報
- http://kw.maruzen.co.jp/ln/ec/ec_asahi_shinbun03.html 2011.10.16 参照
日本新聞協会調査
- <http://www.pressnet.or.jp/data/employment/employment03.html> 2011.10.16 参照
電子政府の総合窓口イーガブ
- <http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S23/S23HO203.html> 2011.10.16 参照
看護師の資格・仕事ナビ <http://www.aka-iwa.com/003/ent636.html> 2011.10.16 参照